

## 総説論文

### 児童・生徒の描画のつまずきに対する研究動向と課題

— 1970年代以降の美術科教育研究を中心とした文献調査から —

### **Research trends and issues regarding children's drawing difficulties: From a literature survey focusing on art education research since the 1970s**

伊東一誉

国際学院埼玉短期大学幼児保育学科

本稿では、児童・生徒の描画のつまずきに対し、これまでどのような研究が為されてきたのかを整理し、現在までの課題について明らかにするため、美術科教育分野を中心とした文献調査を行った。第一に、1969年以降約30年間において、学会誌『美術教育学』に掲載された論文を調査し、描画のつまずきにかかわる研究の推移や全体数に対する割合を明らかにした。第二に、所定のキーワードによる論文検索から、近年までの描画つまずき研究の動向を調査し、代表的な研究分野と内容、研究目的等の特徴を整理した。その結果、学会誌『美術教育学』における論文数は増加しているものの、描画や描画過程、描画のつまずきに着目した論文自体の割合は少数にとどまるか、減少傾向にあることが分かった。また、保育・教育現場を想定した描画研究は、子ども・教師の両視点から指導法が検討されており、現在は特に「子どもの苦手意識の克服」に目的が傾倒していることから、環境整備や授業の題材の改善に関心が高いことが分かった。一方、描画のつまずきに対する解釈が時代的に変化していることや、描画研究自体の複雑さや困難さから美術科の授業や活動を想定した具体的なつまずき克服の手立てが見出されないままであること、特別支援研究や心理学研究の分野において多様な視点からの描画研究が進められており、一方で美術科教育研究と描画研究が乖離していることなど、課題も明らかになった。

キーワード:描画、つまずき、苦手意識

#### 1. はじめに

##### 1-1 課題の所在

保育・教育現場において、絵を描く力はあらゆる創造的活動に汎用される基礎技能として重視されてきた。近年では芸術文化の価値の広がりや背景として、多様な表現媒体や素材を用いた実験的な創作活動が報告されているものの、子どものイメージを形にし、身近な道具と環境下で実践できる描画活動は、美術科教育<sup>註1)</sup>の原点に位置づけられている。美術科にかかわる保育者や教師らは、子どもの描く絵から発達や心的動向を捉え、主題の設定や教授方法を見直しながら、「絵を描く力をどのように高め育てるか」という問いを重ね

てきた。

一方、描画活動の効果的な教育的支援を検討するためには、「どうして絵が描けないのか」という視点も重要である。すなわち、描画過程で子ども自らが「描けない」と判断した場合や、描かれた絵や作品に対して他者が「失敗だ」と評価した場合、その要因を明らかにし、克服可能性を検討しようとする視点である。教育研究においては、学習過程に生じる失敗が学習者の動機に大きく影響を与え、自主学習や成長につながるポジティブな効果をもたらす可能性がある反面、動機付けの低下、無力感、抑うつ症状等ネガティブな影響を引き起こす危険性を含むことが指摘されている<sup>1)</sup>。池田・三沢(2012)は、失敗とは「一人もしくは複数の人間がある行為を行うものの、それが当初の目的達成につながらない、あるいは望ましくない結果が生じること」であると述べる<sup>2)</sup>。失敗を「行為の結果」と捉えると、描画行為の結果は絵(作品)、またはそれに対する評価を指すと言える。伊東他(2023)が指摘するように、行為の結果が可視化され自己や他者に認識されやすいことが、描画をはじめとする視覚表現領域の特徴であり困難さである。こうした失敗の可視化が、描画のつまずきの要因となり得る。また、その要因は描画過程だけでなく、描画者自身の心理状態や身体性、授業環境等に起因するなど複雑である一方、「描けない」という言葉に集約され、言語化されにくい<sup>3)</sup>。

そこで失敗に至る過程に着目し、つまずきの要因を整理することで効果的な指導の方法を検討することが重要であると考えられるが、高浦(1987)は美術科教育分野において個人が絵を描く過程に着目しようとする視点は少ないと指摘する<sup>4)</sup>。描画過程における教師の過度な介入は、子ども独自の表現を阻害することが懸念されるため、主として完成された作品を通して、描画の技能や主題に対する見方、学習態度等が評価される。また、「見る・描く」という描画の静的プロセスから、「子どもがつまづいているか、そうでないか」を客観的に判断することは容易ではない。

しかし描画のつまずきに対して研究的視点を向けることは、描画指導の向上につながるだけでなく、描画以外の表現活動に汎用され、ものづくりの質を高めることに結びつくと考える。そこで、美術科教育分野においてこれまで子どもがつまずきがどのように捉えられ、描画指導の検討に結びつけられていたかについて改めて整理し、その成果や課題を見直しながら今後の研究方法を検討する必要がある。

## 1-2 研究目的

本稿は、美術科教育における描画指導の教育的支援の開発を目指したプロジェクト研究の一環である。1-1に示した課題から、描画活動のつまずきについてこれまでどのような実践と考察が重ねられてきたのかについて成果を見直し、基礎データとして整理する必要があると考えた。そこで、学会誌に掲載された研究論文を文献調査の対象とし、子どもの描画のつまずきにかかわる実践や研究の動向を明らかにすることにした。

近年では、描画活動へ向ける研究的視点が多岐にわたっている。またつまずきという概念にも、「失敗」「困難」「障壁」「エラー」「欠陥」等、いくつかの枠組みや質的階層がある。そこでまず、本稿で指す描画のつまずきの意味を整理する必要がある。

美術科教育において指す絵画は、線(形)、色彩、明暗、テクスチャーを形成要素として成

り立つ<sup>5)</sup>。この絵画は制作過程と効果の違いから、描画と版画に大別される。描画とは、形成要素の違いから、彩画(**painting**)と素描(**drawing**)に分類できる。本稿では、この彩画と素描を含む描画活動を調査の対象とする。

また、本稿で指すつまずきは、伊東他(2022a; 2022b)の調査をもとに「活動プロセスで生じる小さな障壁(**Stambling Blocks**)」と定義し、完成された絵(作品)に対する失敗に限定せず、描画過程で感じる困難やジレンマを含めて捉えることとする<sup>6)7)</sup>。また、描画活動を通じて子どもが感じたつまずきは、美術科の授業自体に対する「苦手意識」「嫌悪感」「トラウマ」といった二次的な広がりを見せる傾向にある。そこで調査においては、描画に対する障壁の他に学習者が学習に対して抱くネガティブな感情も含めて「描画のつまずき」と捉えることとする。

上記の内容を前提として、本稿では、(1)子どもの描画のつまずきに対してどのような指導が模索されてきたか、(2)つまずきに対する指導からどのような成果が得られたかについて考察したい。そこで、児童・生徒の描画のつまずきに対する研究動向を調査するため、以下のような2つの視点から調査を行う。調査1では、美術科教育分野における主たる学会誌を対象に、刊行からおおよそ30年程度の期間に掲載された論文全体数に対する本テーマの割合と推移を示す。ここから、「美術教育学分野においてどのような研究が積み重ねられ、変化してきたのか」が明らかになる。調査2では、本テーマに該当する近年の研究論文を取り上げて内容を精査し、関心の所在や研究の傾向について検討する。ここから、「美術教育学分野を含め、近年までにどのような研究の広がりを見せているのか」を明らかにする<sup>8)</sup>。

## 2. 調査

### 2-1 方法

調査1ではまず、国立国会図書館における資料収集から調査対象となる学会誌のバックナンバーを見直し、(a)研究論文・報告書の全体数、(b)描画を主題とした研究論文数、(c)描画過程に着目した研究論文数、(d)描画のつまずきにかかわる研究論文数を取り出し、全体数に対する割合を示す。次に、学会誌の発行年ごとに、論文の中で用いられる「つまずき」というキーワードにかかわる言葉を抽出し分類する。ここから、美術科教育分野における描画研究への関心の推移、つまずき研究の推移や質的变化を明らかにする。

調査2では、J-stageを利用した論文検索から本テーマのキーワードに該当した研究論文を抽出し、その内容を精査して分類する。論文の掲載年について制限は設けず、収集の指標を以下のように設定する。(a)子どもの描画活動に関する研究、(b)描画活動のつまずきを主題としている、または重視している研究、(c)描画のつまずき研究に対して重要な示唆を与えられ得る研究とした。(a)~(c)のいずれかに該当する研究論文を抜き出して内容を精査することで、美術科教育分野を中心とした描画に対する研究的関心や動向について検討する。

### 2-2 文献調査の対象と年代

調査1では、特に学会誌『美術教育学』に掲載された一連の論文・実践報告等に着目し、美術教育学研究の動向を明らかにすることにした<sup>注2)</sup>。学会誌『美術教育学』は、美術・芸術の教育に携わる者すべてが交流・連携し、理論研究と実践研究の質を高め、日本社会の中で美術・芸術教育の発展に努めることを目的とし、1963年に設立された大学美術教育学会において1969年に創刊され、それ以降年一回刊行されている学会誌である。

調査期間は創刊年(1969年)から30年程度とし、およそ10年ごとに区分して3期にわたる描画研究の推移を特徴づけることにした。

### 3. 結果

#### 3-1 学会誌『美術教育学』の調査から得られた描画のつまずき研究の推移

調査1の結果、1969年以降の33年間において、学会誌『美術教育学』における論文及び実践報告等は、計658編であった(ただし、本調査においては1995-96年に該当する資料を見つけられなかったため除外し、2002年までを調査対象とした)。そのうち、児童・生徒の描画を主題とする論文は108編であり、中でも描画過程に着目した論文は30編であった。また、描画のつまずきを主題とした論文数は12編であった。

「掲載論文数」「描画研究数」「描画過程研究数」「描画つまずき研究数」の各項目の推移と全体数に対する割合と特徴について、表1にまとめた。学会誌『美術教育学』においては1990年以降に論文数が大きく増加しているものの、描画研究の割合はほとんど変化がないことが分かった。また、描画研究の中で描画過程に着目した論文の割合についても、一貫して3割程度にとどまっていた。描画に対する「つまずき」という研究的視点は1980年以降に現れ、その後も研究が継続されているものの、2002年までに減少が見られた。

次に、「つまずき」というキーワードに関連して用いられた言葉について抜き出し、掲載年ごとに分類して表1に記載した。各時期の特徴について下記に示す。

1969-79年においては、児童・生徒がつまずいている状態を、「臆病」「自信がない」「あいまいな態度」「表現意欲を欠く」等、消極的な学習態度や表現への恐れを指していることが分かった。また、「たんなる模倣」「型にはまる」等、表現の独自性を欠く状態を指す場合や、「稚拙」「勉強不足」「反省」等、技能不足に言及する場合があった。こうした技能不足を指摘する言葉は、教師が児童・生徒を評価する場合だけでなく、児童・生徒自らが自分の作品を、フィードバックシート等を用いて評価する場合にも見られる言葉であった。つまずきの状態を評価する言葉に対し、克服の方法を探求しようとする言葉が並んで現れていることから、描画力の向上を前提とした見方が「つまずき」にかかわる評価姿勢に内包されていることが示された。

1980-89年では、「つまずき」という概念が現れ、描画過程を細分化して分析しようとする研究が見られた。また、「失敗」「無力感」「停滞」「悩み」「苦しみ」等がつまずきを表現する言葉として用いられ、描画作品の評価に対する重要度の高まりや、児童・生徒の表現意欲が著しく低下した状態、低下した状態から抜け出せない心理状態が、使用される言葉の中に含まれていることが分かった。

1990-2002年では、「つまずき」の他、「障害」「発達的変容」「肢体不自由」という言葉が

現れた。また、漫画やアニメーション文化が子どもの描画表現へ及ぼす影響等を危惧する論文が現れ、描画活動を含む表現領域全体に対し、「均質性」「消費性」「閉鎖性」といった批判的見方が示された。1980-89年の論文に見られる「つまずき」の意味に対し、1990-2002年における「つまずき」という言葉が内包する意味や解釈の質的な変化が示唆された。また、描画のつまずきを見る対象や研究のフィールドが、健常児から障がい児に変化していったことも特徴的であった。

児童・生徒のつまずきを解釈する教師・研究者らの視点が、各年代によって大きく異なることが明らかになった。

表1 学会誌『美術教育学』における描画つまずき研究の割合と特徴

掲載年	掲載論文数	描画研究数	描画過程研究数	描画つまずき研究数	つまずきに関連する言葉
1969-1979	110	16 (14.55)	6 (5.45)	0	臆病、自信がない、あいまいな態度、不自由、たんなる模倣、矛盾、表現意欲を欠く、曖昧、型にはまる、見通しが曖昧、稚拙、勉強不足、反省、壁、試行錯誤
1980-1989	115	21 (18.26)	4 (3.48)	4 (3.48)	つまずき、失敗、無力感、戸惑い、停滞、苦しみ、悩み、かきかえ、形態の認知が断片的
1990-2002 (1995-96を除く)	433	71 (16.40)	20 (4.62)	8 (1.84)	発達の変容、ぶれ(揺れ動き)、つまずき、退行現象、均質性・消費性・閉鎖性、障害、知能障害、視覚障害、肢体不自由、手直し、試行錯誤、苦痛

注：()内の数値は、掲載論文数全体に対する割合

### 3-2 収集された文献の分類と年代ごとの質的变化

調査2において、2-1に示した検索条件から児童・生徒の描画のつまずき研究の論文・報告書等を抽出したところ、今回の調査に該当する資料は26編であった。ただし、3-1に該当していても、論文検索のキーワードから抽出できない場合にはデータから除外した。(例えば、論文の表題や要旨に特定のキーワードが用いられていない場合は、論文検索において抽出できなかった。)一方、美術教育学分野以外の学会誌からも、2-1に示す条件に当てはまる論文が見つかる場合もあった。これについては内容を精査し、「美術科教育研究にとって今後重要な知見を与える可能性がある」と判断できた場合において、資料に含んだ。

資料の内容を精査したところ、主として(1)描画技能の向上を目指した研究、(2)描画に対する心的負担感の軽減を目指した研究に大別できることが分かった。そこで、両者を掲載年ごとに分類して表2に整理した。また、描画のつまずきに言及していなくても、描画を可能にする技能や過程に研究的関心に向け、今後描画のつまずき研究にかかわると予想される論文については、表3に別途整理した。

#### (1) 描画技能の向上を目指した研究

描画技能が指す各課題については、人物画、静物画、風景画などが挙げられたが、主として(a)写実的に描くことのつまずき、(b)独創的に描くことのつまずき、に大別できること

が分かった。

(a)は、写実描写のつまずきが生じる時期に応じて、描画方法やモチーフが異なるものの、評価基準には共通性が見られた。主として小学校図画工作科の授業を対象とした調査と、思春期～青年期における「描画の危機」と言われる時期を対象とした調査があり、いずれも美術科教員としての経験をもつ執筆者の知見を根拠とした評価基準に応じた考察が為されていた。子どもの描画を発達的に捉える視点から、写実描写が可能になる時期(子どもが「写實的に描きたい」という欲求が生じる時期)があることを見出し、児童画における見方と描き方のギャップから困難が生じた場合の指導法について検討することを目的とした研究論文であることが分かった<sup>9)10)11)12)</sup>。

(b)は、主として授業の構造や主題、他者との関係性、教師からの評価など多角的な要因から、子どもの独創的な表現が抑制される場面について検討しようとした<sup>13)14)15)</sup>。つまずきの時期については特定されておらず、授業題材も幅広い。独創的な表現のつまずきがある場合、子どもの置かれた状態を判断する教師の目が重視され、子どもとのかかわりが具体的な授業記録を通して報告されている。

### (2)描画に対する心的負担感の軽減を目指した研究

「美術の授業が嫌いだ」「絵を描くことが苦手だ」といった児童・生徒の心的負担感を、授業実践の中で克服しようとする研究は、1990年頃から現れ2000年以降増加傾向にあることが分かった。研究の目的は、(a)絵に対する柔軟な評価視点の提供、(b)描画材や描画環境の工夫に大別することができる。

(a)は、主として児童・生徒の苦手意識を受け止め、描画活動の場を描画者同士のコミュニケーションの場と捉え、他者の描き方やものの見方を理解したり柔軟にしたりする姿勢を育成しようとする研究と言える<sup>16)17)18)19)</sup>。こうした研究では、授業の題材や教師のかかわり方以上に、絵や作品をめぐる描画者同士の対話の時間が重要となる。また、子どもが自身の表現活動に対してどのような自己効力感を抱いているのかを量的に測定するため、美術科の授業を想定した自己効力感尺の開発を進める研究もあることが分かった。

(b)は、描画の具体的な障壁を軽減することで、「描くこと」に対して子どもが気軽に挑戦し、困難な課題を反復して習得できるような道具環境を開発しようとする視点である<sup>20)21)22)23)</sup>。例えば鉛筆や絵の具などの描画材がもつ操作の難しさや、修正の難しさといった描画材がもつ障壁に変更を加えることで、子どもが新鮮さをもって課題に向かうことができるとする報告がある一方、専門的な職業人の育成の場において、写実描写の技能を習得するためのツールの一つとして提案しようとする報告もあることが分かった。

### (3)描画のつまずき研究に今後かかわると予想される研究

(1)(2)の他に、今後、描画のつまずき研究に対して重要な示唆を与えると予想される研究がいくつか抽出された。これらは、(a)描画という行為自体を解明しようとする研究、(b)特別支援研究の一環としての描画つまずき研究に大別することができた。

(a)は、「画家はなぜ絵を描くことができるのか」という描画行為の根本原因や動機に研究的視点を向け、それを可能にする描画熟達者の身体運動や見方を明らかにしようとする視点である<sup>24)25)26)</sup>。これらは、コンピュータによる描画開発やロボット開発に応用される可能性を内包している。こうした視点は、「子どもがなぜ絵を描こうとするのか」「描画力を向上させる具体的な手段はどこにあるか」等、描画力を育成する動機や行為そのものの意

義を問い直し、美術科教育分野において大きな示唆を与える可能性がある。

(b)は、描画を含めた「描く・書く」ということに不器用さのある子どもの支援開発を目的とした研究的視点である<sup>27)28)29)</sup>。集団で実施される美術科の授業や活動ではなく、個々の課題や性質を詳細に見て、個人の変化や成長を時間的推移の中で捉えようとする研究方法は、授業を想定した多くの美術科教育分野における研究方法とは異なっている。しかし、子どもの身体的な発達から描画という運動を捉えようとする視点は、美術科教育に対して新しい示唆を与え、具体的な支援策の開発に結びつく可能性がある。

表2 検索から収集された描画のつまずきにかかわる研究論文の内容別分類

掲載年	描画技能向上に着目した研究	苦手意識改善に着目した研究
1970 -1979	植木利廣, 「美術教育の現代化と学習改善の研究」, 1975, 美術教育 215号, pp.7-9	
1980 -1989	近藤恒明, 「美術教育では子どもの何をどう育てるか」, 1981, 美術教育 237号, pp.6-10 高浦浩, 「児童画のつまずきの基本構造—観察表現におけるつまずきの傾向と発生原因—」, 1987, 美術教育学 第9巻, pp.123-133 新井哲夫, 「描画の発達と『主題』意識—『主題』意識に基づく描画発達の検討—」, 1989, 美術教育学 第10巻, pp.175-185 長尾裕太郎, 「創造の喜びを味わえる生徒をめざして 1年・絵画『自分を描く』の実践をとらえて」, 1989, 美術教育 258号, pp.28-40	
1990 -1999	高浦浩, 「つまずきの視点から見た人物素描の表現過程」, 1990, 美術教育学 第11巻, pp.189-198 高浦浩, 「児童の描画表現のつまずきと自己認識の相関について」, 1991, 美術教育学 第12巻, pp.135-144	高浦浩, 「児童の描画表現のつまずきと自己認識の相関について」, 1991, 美術教育学 第12巻, pp.135-144
2000 -2009	高木, 松田, 曾我, 瀧, 志摩, 吉本, 「初心者のための基礎的鉛筆デッサン学習システム」, 2003, 画像電子学会誌 第32巻 第4号, pp.386-396 洲上季代絵, 「デッサンプロジェクト—描画支援に関する試み」, 2003, 図学研究, pp.1-4 佐藤紀子, 西井美甫, 洲上季代絵, 「デッサンプロジェクト—初心者が認識するデッサンとは, その傾向調査および分析—」, 2004, pp.75-80	島越亜矢・吉田泰男, 「授業科目『表現IIA』における学びの実態から授業改造を考える—授業中のつまずき、失敗が示すもの—」, 2001, 山陽学園短期大学紀要 第32巻, pp.45-68
2010 -2019	中尾繁樹, 「通常学級におけるインフォーマルアセスメントの有効性に関する考察—描画と姿勢の観察から—」, 2011, 関西国際大学研究紀要 第12号, pp.13-24 中島そのみ, 大柳俊夫, 中村裕二, 滝澤聡, 池田千沙, 仙石泰仁, 「健常児・者における描画中の運筆遂行能力の発達特徴」, 2015, 日本発達系作業療法学会誌 第3巻 第1号, pp.46-52 平星允彬, 「思春期における描画の危機の研究—その原因と学習指導のあり方—」, 2016, 教育デザイン研究 第7号, pp.132-140 池田千沙, 中島そのみ, 大柳俊夫, 後藤幸枝, 仙石泰仁, 「描画特徴と運筆動作の発達の傾向」, 2016, 日本発達系作業療法学会誌 第4巻, 第1号, pp.39-47	降旗孝, 「図画工作・美術への[苦手意識]の実態と解消のための要素—目指すべき造形美術教育の教育コンテンツ開発に向けて—」, 2016, 美術教育学研究 第48号, pp.369-376 澤田直明, 「小学校図画工作科における『創造的模倣』の効果—児童の苦手意識の軽減を図り, 意欲的に自己の表現を追求する姿を目指して—」, 2016, 教育実践研究 第26集, pp.121-126 島田由紀子, 「幼児, 児童のメソッドによる描画指導法の研究」, 2017, 和洋女子大学紀要 第57集, pp.87-96 降旗孝, 「苦手意識を抱かせない教育コンテンツの研究・開発—図画工作・美術に対する苦手意識解消の試み—」, 2018, 山形大学教職・教育実践研究 第13号, pp.31-40 谷田良子・前田基成, 「美術科に対する自己効力感尺度作成」, 神奈川工科大学研究報告, A-44巻, 2020, pp.17-23.

表3 検索から収集された描画のつまずき研究に今後かわると予想される研究の分類

掲載年	特別支援教育分野における描画研究	心理・認知科学分野における描画研究
2010 以降	吉村夕里, 「表現活動をアフォードする環境と姿勢—運動障害をもつ幼児の人物描画の変容—」, 2010, 『心理社会支援研究』創刊号, pp.13-27 西尾千尋, 青山慶, 「子どもの描画行為における二重性知覚の発達: なぐりがきにおける調整行為からの検討」, 2023, 『生態心理学研究』第15号, pp.47-66	野中哲士, 西崎実穂, 佐々木正人, 「デッサンのダイナミクス」, 2010, 『認知研究』17, pp.691-712 西崎実穂, 野中哲士, 佐々木正人, 「一枚のデッサンが成立する過程—姿勢に現れる視覚の役割」, 2011, 『質的心理学研究』第10号, pp.64-78 野澤光, 「全身運動と精緻運動が一体化した書家の描画スキル」, 2021, 『生態心理学研究』第13号, pp.53-55

### 3-3 各研究視点から得られた成果と課題

3-2 で得られた各研究視点から、描画のつまずきに対する具体的指導の成果と課題をそれぞれ見出すことができた。指導の特徴を分類したところ、四つの枠組みに整理することができたため、これらを図1にまとめた。

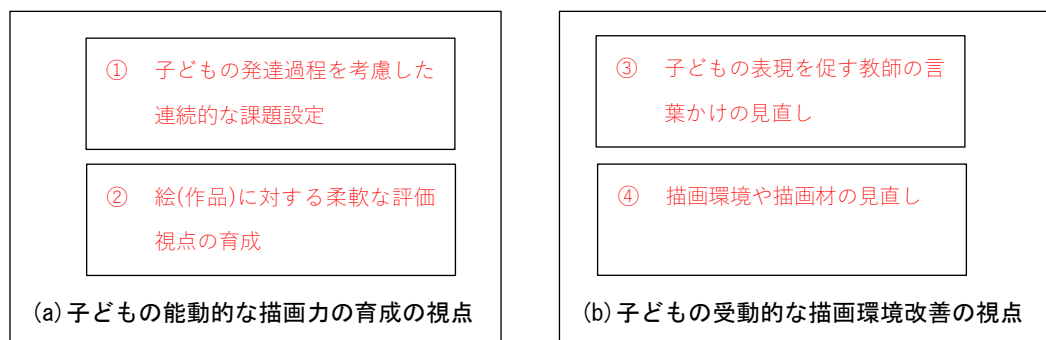


図1 描画のつまずきに対する指導の枠組み

児童・生徒の描画のつまずきに対する指導の枠組みとは、以下の通りである。

第一に、子どもの発達過程を考慮した連続的な課題設定という視点である。これは主に写実描写の技能の習得に際し、客観的なモノの見方と描き方を指導する場合が想定される。高浦(1990)が示すように<sup>30)</sup>、何度も同じ課題を繰り返すことで、対象を捉える見方に迷いがなくなり、描画材の操作がスムーズになるという成果が見られた。しかし、質的・量的に学校現場での実践が不足しており、専門的な技能以外は学習動機を形成しにくい。また、描画技能に対する豊富な知見をもって指導にあたることのできる教員の少なさや、課題に向かうことができる十分な時間を確保することが難しい等といった課題が挙げられる。

第二に、絵(作品)に対する柔軟な評価視点の育成という視点である。絵に対する自己評価や他者評価は、描画指導だけでなく絵画鑑賞の場面でも応用されている。しかし、描画者自身の作品に対する柔軟な見方は育ちにくく、単純な技能の優劣による評価や他者との比較に陥りやすい。自己効力感・自尊心の育成という視点も含め、絵画の価値や美醜を判断する指標をどのように育むのか、具体的な検討が必要である。

第三に、子どもの表現を促す教師の言葉かけの見直しという視点である。植木(1975)が提案するように、子どもが表現に向かう姿勢を育成するため、教師が描画過程でどのような



言葉かけをするのがこれまで議論されてきた<sup>31)</sup>。研究授業の場でも現在までに幅広く実施されている一方、時代性を考慮して子どもを捉える継続的な研究視点が必要である。

第四に、描画環境や描画材の見直しという視点である。ICT 機器を用いた描画材の開発から、描画者が抱く描画材への負担感や嫌悪感を軽減し、何度も描画行為を繰り返すことに大きな利点がある。一方で、保育・教育現場における環境の差異や、機器の使用・応用に長けた人材の偏りによって、現在までに一般化には至っていない。

上記に示した四つの枠組みは、(a) 子どもの能動的な描画力の育成の視点、(b) 子どもの受動的な描画環境改善の視点に大別することができる。(a)は、子ども自身がもつ描画の技能や表現の意欲を引き出し、自ら能動的に描画に向かい技能を高める力に結びつく可能性がある。(b)は、子ども自身の力では超えることが難しい障壁に対し、環境を変化させることで改善に結びつくことができる可能性がある。

調査 1、2 における結果から、これまで美術科教育分野を中心とした描画指導は、子どもの立場と教師の立場、両面において開発されてきたものの、どちらもつまずきに対しての検討は不十分であり、質的・量的に継続的な研究が必要であることが分かった。

## 4. 考察

### 4-1 美術科教育分野を中心とした描画のつまずき研究の推移

本調査結果から、描画のつまずきに対するこれまでの研究動向が特徴づけられ、成果と課題が明らかになった。

1970 年以降、美術科教育分野における研究論文の全体数は増えているが、学会誌『美術教育学』の掲載論文における描画研究の割合は全体に対して 2 割程度にとどまっており、その多くが完成された作品を通じた評価や分析であるため、描画活動中に生じるつまずきの要因については未だ十分な検討が為されていない。また、研究方法の開発や具体的な介入策の分析についても、質的・量的に不十分であると言える。

保育の現場や学校を想定した具体的な描画の実践報告においては、子どもの目線と保育者・教師の目線から、指導方法が継続的に模索されている。ここから、多様な芸術文化の潮流や美術科教育の価値観の変遷においても、描画活動が子どもの表現にとって基礎的な位置づけとして重視されていることが分かった。描画指導の枠組みは、子どもの能動的な描画力を育成しようとする方向性と、子どもにとって受動的な環境要因を改善しようとする方向性があり、今後も両者の視点から指導が検討されることが期待される。

また、「描画のつまずきをどのように保育者・教師が解釈するか」についての変化は、時代的背景が大きく影響したと考えられる。つまずきに対する捉え方は、「指導者が子どもに対してどのような教育目標をもち、子どもを理解・判断するか」が顕著に反映されていた。特に美術教育分野においては、近年、苦手意識の軽減を目指した研究的視点が増加傾向にあり、児童・生徒の心理状態や学習態度に対する関心が強まっていることが示唆された。今後は授業を作る教師らの主題設定や環境整備が注目される。

一方で、描画自体に対する研究的関心は特別支援分野や専門的な職業教育における研究分野に傾倒しており、美術科の授業を想定した描画のつまずき研究は衰退傾向にあると示

唆された。この背景には、美術科教育分野における描画への関心自体が衰退し、曖昧化している可能性を指摘することができる。すなわち、「なぜ絵を描く必要があるのか」「どのように描画指導を行うべきなのか」「描画を含む芸術表現について、どんな価値判断のもとに教育を行えばよいのか」という疑問が、美術科教育に携わる保育者・教師にあるのではないかと考えられる。そこで、子どもに対する個別の支援や専門家による突出した描画力の解明を目指す研究が、今後、保育・学校現場における描画指導にどのように連結していくかが課題となる。

こうした研究動向から、「絵を描く」という行為自体が個別化・専門化され、すべての子どもに必要な学習内容としての位置づけから逸脱する場合が危惧される。創造的な表現活動の基礎として、描画の学習の意義を問い直す必要があるだろう。

#### 4-2 今後の検討事項

本稿は、美術科教育分野を中心とした描画のつまずき研究の動向(これまでの成果と今後の課題)について、文献調査から基礎データを得た。その結果、今後の研究的視点や方法に関するいくつかの課題を見出すことができた。

しかし、本調査において対象とした学会誌は、美術科教育分野における一部分であり、今後も調査の枠組みを広げて文献を整理する必要がある。論文検索についても精度を高めて再調査を行いたい。また今回の文献調査では、研究論文の変遷にある背景について、十分な調査と検討を行うことができなかった。描画に対する関心がどんな変化を示し、美術科の授業や活動がどのように実施されてきたのかについて、引き続き調査を行う必要がある。

また、個別の描画過程で生じる課題の曖昧さや複雑さにより、描画のつまずきに対しては質的・量的に十分な効果検証が為されておらず、一般化には至っていない。児童・生徒の身体的発達や空間認知の程度、学習環境、自己の表現に対する評価、他者に対する意識等を考慮した多角的な指導研究を重ねる必要がある。

#### 謝辞

本研究は、JSPS 科研費 23K12789 の助成を受けたものです。

著者の利益相反：開示すべき利益相反はない

#### 文献

(雑誌)

- 1) 桜井茂男、「小学生における学習動機の測定」、1989、奈良教育大学紀要、38 巻 1 号、207-214
- 2) 池田浩・三沢良、「失敗に対する価値観の構造—失敗感尺度の開発—」、2012、教育心理学研究、60 巻、367-379
- 3) 伊東一誉・赤羽尚美・田代琴美、「幼児期から青年期に至る描画表現のつまずきの検討一意

- 欲の変化に見るつまずきの時期と要因一」、2023、美術教育学研究、第55号、41-48
- 4) 高浦浩、「児童画のつまずきの基本構造—観察表現におけるつまずきの傾向と発生原因一」、1987、美術教育学研究、第9巻、123-133
  - 5) 金子一夫、『美術科教育の方法論と歴史』、1996、中央公論美術出版
  - 6) 伊東一誉・赤羽尚美・田代琴美、「造形活動における『つまずき』要因の検討—自己評価、他者意識、身体性の関連一」、2022a、美術教育学研究、第54号、33-40
  - 7) 伊東一誉・赤羽尚美・田代琴美、「造形活動における『つまずき』構造の位置づけと教育的支援の可能性」、2022b、美術教育、306、8-17
  - 8) 文献調査の方法について、以下の論文を参考にした。三根和浪・宮本恭二郎・橋本泰幸、「学会誌に見る美術教育研究の動向と課題」、2006、日本教科教育学会誌、第29巻第3号、87-96
  - 9) 高浦浩、「児童画のつまずきの基本構造—観察表現におけるつまずきの傾向と発生原因一」、1987、美術教育学 第9巻、123-133
  - 10) 高浦浩、「つまずきの視点から見た人物素描の表現過程」、1990、美術教育学 第11巻、189-198
  - 11) 新井哲夫、「描画の発達と『主題』意識—『主題』意識に基づく描画発達の検討一」、1989、美術教育学 第10巻、175-185
  - 12) 平星允彬、「思春期における描画の危機の研究—その原因と学習指導のあり方一」、2016、教育デザイン研究 第7号、132-140
  - 13) 植木利廣、「美術教育の現代化と学習改善の研究」、1975、美術教育 215号、7-9
  - 14) 近藤恒明、「美術教育では子どもの何をどう育てるか」、1981、美術教育 237号、6-10
  - 15) 長尾裕太郎、「創造の喜びを味わえる生徒をめざして 1年・絵画『自分を描く』の実践をとおして」、1989、美術教育 258号、28-40
  - 16) 高浦浩、「児童の描画表現のつまずきと自己認識の相関について」、1991、美術教育学 第12巻、135-144
  - 17) 降旗孝、「図画工作・美術への〔苦手意識〕の実態と解消のための要素—目指すべき造形美術教育の教育コンテンツ開発に向けて一」、2016、美術教育学研究 第48号、369-376
  - 18) 澤田直明、「小学校図画工作科における『創造的模倣』の効果—児童の苦手意識の軽減を図り、意欲的に自己の表現を追求する姿を目指して一」、2016、教育実践研究 第26集、121-126
  - 19) 谷田良子・前田基成、「美術科に対する自己効力感尺度作成」、神奈川工科大学研究報告、A-44巻、2020、17-23
  - 20) 降旗孝、「苦手意識を抱かせない教育コンテンツの研究・開発—図画工作・美術に対する苦手意識解消の試み一」、2018、山形大学教職・教育実践研究 第13号、31-40
  - 21) 島田由紀子、「幼児、児童のメソッドによる描画指導法の研究」、2017、和洋女子大学紀要第57集、87-96
  - 22) 淵上李代絵、「デッサンプロジェクト—描画支援に関する試み」、2003、図学研究、1-4
  - 23) 高木佐恵子、松田憲幸、曾我真人、瀧寛和、志摩隆、吉本富士市、「初心者のための基礎的鉛筆デッサン学習システム」、2003、画像電子学会誌 第32巻 第4号、386-396
  - 24) 野中哲士、西崎実穂、佐々木正人、「デッサンのダイナミクス」、2011、『認知研究』17、

691-712

- 25) 西崎実穂、野中哲士、佐々木正人、「一枚のデッサンが成立する過程—姿勢に現れる視覚の役割」、2011、『質的心理学研究』 第10号、64-78
- 26) 野澤光、「全身運動と精緻運動が一体化した書家の描画スキル」、2021、『生態心理学研究』 第13号、53-55
- 27) 中尾繁樹、「通常学級におけるインフォーマルアセスメントの有効性に関する考察—描画と姿勢の観察から—」、2011、関西国際大学研究紀要 第12号、13-24
- 28) 中島そのみ、大柳俊夫、中村裕二、滝澤聡、池田千沙、仙石泰仁、「健常児・者における描画中の運筆遂行能力の発達特徴」、2015、日本発達系作業療法学会誌 第3巻 第1号、46-52
- 29) 池田千沙、中島そのみ、大柳俊夫、後藤幸枝、仙石泰仁、「描画特徴と運筆動作の発達の傾向」、2016、日本発達系作業療法学会誌 第4巻、第1号、39-47
- 30) 前掲書、高浦、1990
- 31) 前掲書、植木、1975

#### 注

- 注1) 本研究は、幼児期から青年期に至る連続的な美術科教育支援を前提としている。美術教育、造形教育、アート教育など、美術の活動を指していくつかの名称があるが、ここでは幼保の表現領域(造形表現)、小学校の図画工作科、中学校美術科、高等学校芸術科までの一連を指して「美術科教育」と記す。
- 注2) 予備調査として行った論文検索において、描画のつまずきに関する研究を取り出すことができたのは、主として学会誌『美術教育学』、『美術科教育』であった。どちらも保育者、学校教員、大学教員、芸術家等、美術科教育にかかわる専門家を構成員とし、査読論文を含む研究・実践報告を現在まで刊行している。また、美術科の授業だけでなく絵画研究、海外の美術科教育研究、歴史研究、現代アートの研究等、多角的な視点から研究の結果が掲載されている。その中で、今回は学術団体としてより早期に結成され刊行された学会誌『美術教育学』を対象とすることが適当だと考えた。